



アングアマ面（乾純之助氏寄贈）

乾コレクション寄贈される

徳之島町花徳の乾純之助氏から今年（昭和52年）8月2日、同氏コレクション 224点（内訳、陶磁器83点、民俗資料 136点、漆器 5点）の寄贈があった。

乾コレクションの寄贈までの経過について述べると、まず、今年の7月末に乾氏の知人である寿屋社長の照屋知宏氏が同氏の手紙と収集品の一部の写真をたずさえて当館を訪ずれた。手紙には博物館が必要ならば寄贈したい旨が認められており、早速、当館では館長と学芸部が話し合った結果、寄贈受入れをすることが決まった。8月1日に館長と宮城学芸員が受領のため徳之島へ出張し、運搬は運送業者に依頼した。

乾氏は大正時代から那覇や八重山で糖業関係の仕事にたずさわっていた経歴の持主で、戦前、沖縄にお世話になったお礼の意味と厚意からの寄贈だという。同氏は戦前にもコレクションを持っていたが、10・10空襲のため那覇の家諸共に焼失し、今回の寄贈品は殆んど戦後、奄美地方で収集したものである。ただし、なかには戦前、八重山で入手したヤラブの木で作ったチャブ台も含まれている。まとまった薩摩焼の資料を受入れたこともあって、館員一同、非常に喜んでいいる。この度の乾氏のご厚意に対して、当館では感謝状を贈呈した。

沖縄県博物館協会結成される

7月8日に当館で「沖縄県博物館協会」（沖博協）の結成大会が開かれました。県内の博物館、資料館、美術館、民芸館、動物園、植物園およびその関係者が相互に連絡をとり合い、そうすることによって博物館事業の振興を図り、あわせて地域文化の向上発展に寄与しようという趣旨で結成されたものです。当日は29の館園の代表者、関係者あわせて50名余が出席、開会の挨拶に始まり、議長選出、経過報告、会則審議、役員選出、来賓挨拶と続いた後報告および討論が行われました。会長には当館の外間正幸館長が推挙され、同時に事務局も当館に置かれることになりました。



沖縄県博物館協会結成大会

報告は読谷村立歴史民俗資料館の名嘉真宜勝館長、首里琉染の安里進研究員によって行われました。両氏は施設の狭さ、設備の不備、学芸員の不在等によって諸活動に支障をきたしている実状を訴え、国や県としても各種施設の果たしている教育的役割を積極的に評価し補助をしてもらいたいと強調しました。また安里氏は職員の資質向上のための研修体制の確立の必要性も指摘しました。

博物館行政、館園の管理運営、展示、教育活動など、沖縄の博物館活動の各面において沖博協の果たすべき役割は大きくなるでしょう。

玉陵獅子像を玉陵へ返還する

30余年間当館に展示され、親しまれてきた玉陵（たまうどうん）の石製獅子像2体が、9月5日に玉陵に返還された。玉陵は1501年に尚真王が建てた王陵であるが、今大戦で爆撃を受け一部が破壊された。今度返還された獅子像もそのとき屋根からころげ落ち陵内に倒れていたものを、当時の首里市民が博物館に運び込んだものである。玉陵が国と県の補助のもとに修理され、その工事が9月30日に完了することになったので、このたび返還されることになった。

当日は所有者の尚裕氏、博物館職員がそれぞれ感無量の面持ちで獅子像を見送った。なお、同像のレプリカが近々尚氏から寄贈され、展示されることになっている。

『混効験集』修理なる

当館所蔵の国指定文化財『混効験集』は、昨年7月から東京の池上幸二郎氏夫妻の手で修理が続けられてきたが、このたび修理が完了し、7月19日に子息の池上幸雄氏によって館に返却された。当日は特別展示室において池上氏、文化庁主任調査官財津永次氏、県文化財保護審議会委員、専門委員等の見守るなかで、仕事を進めてきた文化課の職員と当館職員によって梱包が解かれ、披露された。その後引き続き祝賀会が催された。修理は文化庁の昭和51年度予算で行われた。

『混効験集』は1711年に王府で編集された沖縄最古のこぼし辞書で、当館所蔵のいわゆる評定所本は伝本中最古のものといわれる。戦前尚家にあったものが、『おもろさうし』とともに今大戦中に米国に持ち去られ、戦後沖縄に返還された文化財のひとつである。

博物館文化講座へどうぞ！

県立博物館では毎月1回博物館文化講座を開いています。この講座は昭和49年5月に始まったもので、今年の9月で42回を数えます。12月が第3土曜日、他の月は第4土曜日に開いているもので時間は午後2時30分から約2時間、沖縄の自然、歴史、文化に関する教養講座となっています。内容は高校生を対象としていますが、中学生でも十分理解のできる話もあります。当館主催の特別展と組み合わせることによって、展示の理解を深める講座であったり、実習が入ったりすることもあります。たとえば、今年7月の文化講座「拓本をとってみよう」では、当館所蔵の石碑や石彫類を使って拓本の講習会を開きました。また8月には「沖縄の竹細工展」開催中の特別展示室で、技術保持者の勢理客幸英氏を招き竹細工つくりの講習会を開きました。



第39回「拓本をとってみよう」の講座風景

下に紹介するのは第1回から第48回（来年3月）までの講座の内容です。楽しく学べる講座にしたいと考えていますので、ふるって御参加のうえ意見や希望を出してください。

博物館文化講座一覧

昭和49年度

1. 貝塚の話
2. やきもの話
3. 織物の話
4. サング礁の話
5. 陸産貝の話
6. 琉歌の話
7. 漆器の話
8. 琉球舞踊の話
9. 沖縄の石材彫刻
10. 民具の話

昭和50年度

1. 民芸の話
2. 沖縄の野生の花
3. 沖縄の自然と自然破壊
4. 組踊の話
5. 文化財の保存について
6. 沖縄の仮名文字
7. クモの話
8. 近代沖縄の美術家たち
9. 沖縄の墓制
10. 沖縄古代の対外交渉
11. 郷土の地質
12. 考古学と私

昭和51年度

1. 昆虫の話
2. 明治維新と沖縄—「琉球処分」の歴史的特質—
3. 近代沖縄の歩みと社会教育
4. 沖縄沿近海の魚
5. 琉球の建築
6. 門中の話
7. 沖縄の村
8. 沖縄の古武術
9. 沖縄の子どもの遊び
10. 洞窟の話
11. 身近な野草
12. 沖縄の印章

昭和52年度

1. おもろの話
2. 尚家本「おもろさうし」を読んでみよう
3. 沖縄の藍
4. 拓本のとり方
5. 竹細工をつくってみよう
6. 映画会「戦前の沖縄」
7. ハブの話
8. 沖縄の植物自然
9. 野鳥を中心とした山原の自然
10. 映画会「琉球の自然」
11. 沖縄の神酒
12. 自然観察会「首里末吉の植物」
13. 沖縄の原始農耕



沖縄の竹細工展（この会場で「竹細工をつくってみよう」の講習会を開いた）

沖縄県立博物館への提言

博物館は沖縄のオアシス

嵩元政秀

伊波善猷賞を受賞された考古学者、国分直一先生が数日前ある会席で語られた言葉である。学者らしい発言であり、まさに博物館に展示されたすぐれた民芸品や民俗資料などは見るものよごれた心を洗ってくれる。博物館は心ある旅行者にとって、限られた時間内で沖縄の民俗・歴史・文化などを概観できる最適の場所であり、オアシスであろう。

わが県立博物館も年々資料が豊かになり、展示方法にも研ぎがみられる。前庭に高倉がお目見えしたのはうれしい。欲を言えば、伝統的な民家も欲しい。茅ぶきの石柱、チニブ壁の民家、ウシの屋、ウマの屋などもほとんど見られなくなってきたし、精巧に造られたフルなどだれも見むきもせず、にどんだん破壊している現状である。もう数年もすれば、数百年余も続いた伝統的な民家は消滅してしまうのではなからうか。現在ぼつんとさみしく立つ高倉も、石垣囲いのヒンプン、アシャギ、ウシの屋、ウマの屋、母屋などと共に民家の屋敷内の一建築物として賑やかに立つことを望んでいるのではないだろうか。

近年各地で発掘が盛んになり、貴重な新資料が相次いでいる。これら発掘も市町村教育委員会が主体となりつつあり、発掘品も当該教育委員会やその付属機関で保管・展示・活用がはかられている。ところで県立博物館の考古資料の収集はどのように行なわれているのであろうか。発掘の予算がなく独自の発掘調査が出来ないと聞いている。これでは5年、10年後が思いやられる。一方県文化課の収蔵庫には年々発掘品が増加し、山と積まれつつある。報告後の資料の一般活用のためにも県文化課と県立博物館との提携が必要と考えるが、これは部外者の単純な発想であらうか。

(興南高校教諭、考古学)



親しみやすく個性ある博物館を

比嘉政夫

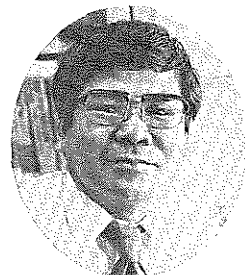
国内、国外を問わず、見知らぬ土地を訪れたとき、私はできる限りその地方の博物館をみることにしている。その地域や国の自然・文化・歴史を知る手がかりを得るのにもっともよい方法だからである。展示物からのその地域

の文化の古さや歴史を知るだけでなく、館のなかのたたずまいや人々の動きをみながら、その地域の文化教育活動の様子をもうかがい知ることができる。旅人の度肝をぬくような珍らしい展示物がいくつあるかということよりも、その土地の人々がどれくらい足を運んでいるかということにも私は興味をもつのである。

いうまでもなく、社会教育機関としての博物館は、古い文化財や資料を保管し展示するだけでなく文化に対する新しい意識、理解を涵養する役割を担っている。そのためには展示の内容、企画についても、学校教育現場や地域社会の声がより多く反映できるようなシステムが必要ではないかと思う。そして、もっと気軽に入れる雰囲気欲しい。文化研究施設としてのいかめしさが日本流の博物館のイメージかも知れないが、日常生活のストレスを解消するようなくつろいだ場所でもあって欲しいのである。

沖縄は、日本の南端に位置し、南北文化の接点ともいわれている。そのような沖縄文化の特徴をもつと理解できるような資料の収集を望むものである。たとえば、沖縄の紅型につながるといわれている、インド更紗やジャワのバティックなどの資料なども展示されると沖縄の文化に対する人々の夢はもっと広がるであらう。そのためには、東南アジア諸地域の博物館への職員・研究員の派遣を含めて、学術的な交流が必要である。

そのような視野をもった運営にもっと力を注いでもらいたい。沖縄県の博物館としての個性の発揮のために。(琉大短大部助教授、社会人類学)



〈新収蔵資料紹介〉

乾氏寄贈の陶磁器



喜名焼壺

昔から奄美地方では琉球焼や薩摩焼、有田焼などの陶磁器類が混在し、使用されてきた。その分布状態をみると、まず、大まかにいって奄美大島を北上すれば薩摩焼、南下すれば琉球焼が多くなる傾向にあるとみている。同氏のコレクションの殆んどは戦後奄美地方で収集したものであり、寄贈品の83点はよくそのことを物語っている。

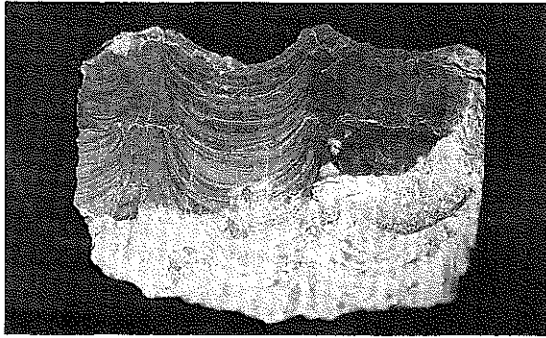
当館では、これまで少なかった薩摩焼の大甕、



薩摩焼水甕

徳利、雲助、小壺、水甕などの資料が一時に増えて喜んでいる。琉球陶器では喜名焼の壺をはじめ、灰釉徳利、黒釉壺、荒焼壺などが含まれている。かわったものでは南中国製の緑釉獅子面付火鉢もある。また、明治の頃から奄美や沖縄でもよくみかけた有田焼の染付徳利8点もまとまった好資料である。

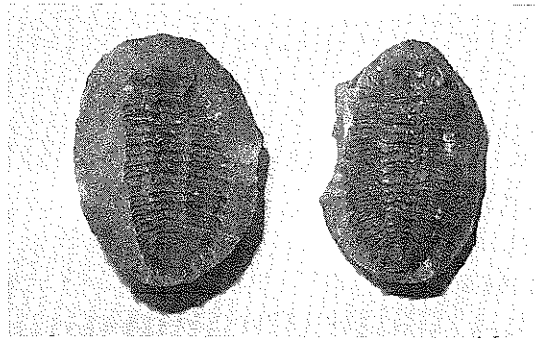
コレニア、と三葉虫化石



コレニア

コレニアは石灰藻の化石と考えられているが、化石ではもとの生物体の構造がよくわからないので、一般にコレニアと呼んでいる。この種の化石はアメリカや中国大陸の後期先カンブリア代の地層から産し、これまでにわかっている化石の中では最古のものという事になる。

標本は東ネパール産で、12~15億年前のものといわれている。これは海外青年協力隊としてネパールへ行き、現在帰国して琉球大学で教鞭をとっておられる丸尾裕治氏（北海道大出身）の寄贈によるものである。なお、同氏からはザクロ石・十



三葉虫化石

字石・緑柱石や藍晶石の特殊鉱物数点も寄贈していただいた。

一方、三葉虫は古生代に三葉虫時代と呼ばれるほど繁栄し絶滅した海生の節足動物の仲間である。標本は体長約5cm、幅約3.5cmの黒褐色泥岩ノジュールで雌型と雄型からなっている。これは、昭和52年8月県出身の喜屋武真栄参議院議員が南米を視察した際ボリビア大使津田天端氏より贈られたものである。なお残念ながら産出層準や時代については不明である。

資料寄贈者御芳名(1) (敬省略)

- 沖野千代(鹿児島県) ザグリ1点
大西照雄(名護市) 知花焼味曾甕1点
安村文(那覇市) 菊型向付3点、六角面取向付1点他5点
比嘉正昌(那覇市) 硯1点
大嶺実清(那覇市) トウイグチ(椿油搾り器)1点
安座間鉄夫(那覇市) 荒焼御殿型厨子甕1点、壺型厨子甕3点
金城ヨシ(那覇市) 算盤1点、ホラ貝1点、龍貼付文壺1点他4点
中村ヨシ(那覇市) 久米島紬綿入れ着物1点
大見謝恒英(那覇市) ジュラルミン製アイロン1点他3点
仲宗根秀夫(沖縄市) 磁器香炉1点
鎌倉芳太郎(東京都) 安国山樹花木記碑(拓本)1点
知念盛一(東風平村) 獅子面付鉢1点
丸尾裕治(北海道) 藍晶石1点、鉄鑿柘榴石5点、十字石5点、緑柱石5点、三葉虫レプリカ化石1点、コレニア1点
宮城春興(那覇市) 家紋入朱塗盃台1点他2点
大原とみ子(鹿児島県) ヒラ1点
新城ナヲル(渡嘉敷村) アサンザニ1点
与那覇清友(那覇市) 牛の鞍1点、スガイ1点、クルマボー1点他1点
中川伊作(沖縄市) 中国古地図1点、日本古地図1点
大城カマ(西原村) 御殿型厨子甕等5点
普天間敏(佐敷村) 箆箭1点
乾純之助(鹿児島県) シャム南蛮甕等陶磁器83点、弁当重等民俗資料136点、漆器5点
玉城武太(糸満市) ティール3点
豊村フサ子(那覇市) 竿はかり3点、三味線箱他2点
比嘉正子(沖縄市) 御殿型厨子甕等7点
西村富雄(那覇市) 瘦瓶1点
喜屋武真栄(沖縄市) 三葉虫化石1点

特別展示室の催し物一覧

(10月以降)

- 9月25日~10月20日
考古資料発掘展—渡喜仁浜原貝塚と苦増原遺跡(当館主催)
11月1日~6日
沖縄県芸術祭美術展覧会(沖縄県主催)
11月8日~15日
沖縄県芸術祭無形文化財工芸展(沖縄県主催)
11月17日~20日
木筆会書道展(木筆会主催)
12月20日~25日
赤土会展(赤土会主催)
2月3日~5日
書道アンデパンダン展(沖縄県高等学校書道教育研究会)
2月7日~12日
第1回高校美術クラブ交流展(4校高校美術クラブ共催)
2月15日~23日
染織デザイン科卒業作品展(首里高等学校主催)
3月2日~5日
研修生成果発表展(沖縄県立伝統工芸指導所)
3月11日~19日
三校陶芸クラブ合同作品展(首里高、沖縄盲学校、沖縄工業高校三校陶芸クラブ)

編集後記

昨年度は沖永良部島から高倉の寄贈があり、今年度は徳之島の乾純之助氏から多数の資料が寄贈された。奄美の人々の好意に報いるべく、奄美の自然・歴史・文化に関する紹介にも力を入れたいものである。(渡)

沖縄県立博物館だより No.3

発行年月日 昭和52年9月30日

編集・発行 沖縄県立博物館

住所 〒903 那覇市首里大中町1の1

TEL. 0988-32-2243